変化と多様性の時代にできること

総務省 大臣官房 政策評価広報課 課長補佐

市川 のり恵

Norie Ichikawa

平成15年 4月 総務省採用
同 行政評価局総務課政策評価審議官室
平成16年 2月 同 大臣官房企画課
平成18年7 月 同 人事・恩給局給与第一係長
平成20年 7月 米国留学（コロンビア大学）
平成22年 7月 総務省情報通信国際戦略局国際政策課課長補佐
平成23年 7月 同 情報流通行政局情報流通振興課情報流通高度化推進室課長補佐
平成24年 8月 同 行政評価局行政相談課課長補佐
平成26年 4月 総務省行政評価局行政相談課上席評価監視調査官
平成27年 1月 併任 大臣官房秘書課課長補佐（ワークライフバランス推進担当）
平成28年 7月 同 大臣官房政策評価広報課課長補佐

現在、私は省内のワークライフバランス推進を担当しており、プライベートでは３歳の息子がいます。このような立場から、総務省で働くことについてご紹介したいと思います。

まず、国家公務員として、災害などの有事には昼夜関係なく国民のために働く必要がある場面はあります。しかし、これと恒常的に長時間働くことは別です。総務省では、「よい政策を作るためには人間としての生活を充実させるべき」という信念を大臣がお持ちであるため、大臣自ら国会対応を合理化されたり、時間と場所にとらわれない働き方を実現するテレワークを推進しており、働き方改革のトップランナーたるべく努力しています。全ての職員は、職場で使っているパソコンを持ち帰ることで、職場とほぼ同じ環境でテレワークができます。私も保育園のお迎えのため17:30に退庁しますが、テレワークによりリモートで仕事ができる環境とそれを受け入れてくれる職場をありがたく思っています。

先日、前消費者庁長官の板東久美子さんのお話を聞く機会があり、「多様な一人一人の状況を活かす組織マネジメントが重要」と教わりました。女性の場合は、出産などで一時的に仕事をセーブする時期もあるでしょう。男性でも、共働きであれば育児、介護のために時間制約がある状況になりえます。また、自分磨きや地域活動のために時間がほしいという人もいるでしょう。変化と多様性の時代に、様々な職員がいる状況をピンチと捉えるのではなく、世の中の縮図と考え、政策の企画立案に活かすことが霞が関に求められているということを学びました。

総務省は、行政運営の改善、地方行財政、選挙、消防防災、情報通信、郵政行政など、幅広い業務を所管し、国民生活の基盤に関わる行政を担う役所であり、多様な課題を解決する可能性をもっています。変化と多様性の時代に一緒によい政策を作っていきませんか。

自分らしく働ける場所

内閣官房 内閣人事局（退職管理第一担当） 参事官補佐

牧野 知子

Tomoko Makino

平成19年 4月 総務省採用
同 総合通信基盤局国際部国際政策課
平成21年 7月 同 情報流通行政局郵政行政部貯金保険課
平成21年10月 内閣官房郵政改革推進室
平成23年 8月 総務省情報流通行政局情報セキュリティ対策室係長
平成25年 7月 英国留学（ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（LSE））
平成27年 7月 総務省情報流通行政局情報流通振興課課長補佐
平成28年 7月 内閣官房内閣人事局参事官補佐

「一生面白いと思える仕事がしたい。」その思いと、魅力的な先輩職員たちの声に導かれて、総務省に入省してから早10年。ICT分野の国際交渉、郵政改革、サイバーセキュリティなど、期待以上に、さまざまな仕事を経験させてもらい、仕事を通じて成長する実感を得てきました。

振り返ると入省当時、私は「女性として働く」ということをあまり現実的に考えていませんでした。仕事と家庭の両立は、自分が頑張れば何とかなると気楽に考えていたのです。

そんな私が最初に重大な決断とぶつかったのが、入省７年目にイギリス留学をさせていただいたとき。家族と離れて生活することに最後まで迷いがありましたが、同じ時期に、総務省の同僚である夫が大使館勤務に配置してもらえたおかげで、国は違ったものの１～２か月に一度はお互いに行き来することができました。職場の配慮のおかげで、世界中の留学生と切磋琢磨しながら、家族ともさまざまな思い出を作ることができました。

留学から帰国してほどなく出産。育休から復帰した現在は、国家公務員制度を所管する内閣人事局に出向し、夫と家事・育児を分担しながら１歳の息子を育てています。

子育ては子どもの急な病気などハプニングの連続。女性が無理をせず働きつづける上で、職場の理解や配慮は欠かせないことを痛感しています。内閣人事局は、国家公務員の女性活躍推進や働き方改革の旗振り役でもあるため、定時退庁や休暇取得推進など職員のワークライフバランス確保に真剣に取り組んでおり、非常に働きやすい職場です。その一方で、自主勉強会などの活動も盛んで、仕事だけをばりばりこなしていた時期とはまた違った形で、日々刺激を受けています。子育て中の女性職員も多く、省庁の垣根を越えたママ友ネットワークができたのも大きな財産です。

その時々のライフステージで自分の働き方を支えてくれた総務省。いつまでも自分らしく働きたいと思っているあなた、ぜひ総務省という職場を考えてみませんか。

輝け、過疎地域！輝け、若者達！

総務省 自治行政局 地域自立応援課 過疎対策室 課長補佐

南里 明日香

Asuka Nanri

平成18年 4月 総務省採用
同 自治行政局自治政策課
平成18年 8月 徳島県県民環境部地域振興局市町村課
平成19年 5月 同 企画総務部財政課
平成20年 4月 外務省国際協力局総合計画課
平成22年 4月 総務省自治財政局調整課
平成23年 4月 滋賀県総合政策部企画調整課主席参事
平成24年 4月 同 総務部自治振興課主席参事
平成25年 4月 同 琵琶湖環境部環境政策課長
平成26年 4月 同 総務部市町振興課長
平成27年 4月 同 総務部財政課長
平成28年 4月 現職

30年と少し生きてきて、私が最も戸惑った言葉の１つが、「女性の視点を行政に活かして下さい。」という、産休に入る私へのエールでした。男性となんら区別なく、学業や部活動そして職務に精励してきたつもりでしたが、突如現れた「女性の視点」。女性官僚としてどう働いていくか。以来、私のテーマの一つです。

私は、幼子を連れて地方赴任をしました。20代から30代はじめの、若く燃える時期に、県の管理職として研鑽することは、総務省ならではのかけがえのない経験です。年上の部下に教えてもらいながら、東京から来た人間として付加価値ある仕事をすること。中長期的なビジョンに向けてマネジメントすること。加えて、保育園お迎え時間の制約の中でも職員がいつでも相談しやすい雰囲気づくりをすること。課の士気を下げずに、自分も課員もワークライフバランスを達成すること。・・・無理ゲーだなぁ、と込み上げる苦笑いを、明るく笑い飛ばしちゃうことにして、とりあえず前へ!と走っていました。

子どもと過ごした東京以外の日本（それこそが、大部分の人が暮らす“日本”なのですが）は、一人で赴任して目にしていた日本の姿よりも、豊かで彩りにあふれたものでした。幼子に声を掛けてくれる道行く人々。地域行事の地蔵盆に招待してくれ、時には子どもを預かってくれるご近所さん。イベントを一緒に盛り上げた保育園のPTA仲間。東京から遊びに来る夫まで飲み会に呼んでくれる友達・同僚。

今、私は過疎対策を担当しています。「女性の視点」の正体は未だおぼろげですが、1人で頑張るのではなく、一人一人が頑張れる仕組みを作ることに心を砕いた経験を糧に、そして豊かな日本のあたたかさを胸に、人口減少時代において、より一層「ひと」を、「地域」を、「子ども達の未来」を大事にし、輝かせてゆく、そういう政策立案をしたい。この思いは女性らしい、というか、私らしいのではないか、と自負しています。「過疎地域が輝かなければ、明るい日本の未来はない。」実は上司の受け売りですが、その気概で日本を創っていきたいです。私達と一緒に、未来を創るチャレンジしてみませんか？

私が総務省で働く理由

内閣官房 内閣サイバーセキュリティセンター 参事官補佐

市田 博子

Hiroko Ichida

平成17年 4月 総務省採用
同 人事・恩給局恩給企画課
平成18年 8月 同 大臣官房総務課
平成19年 7月 同 情報通信政策局地上放送課
平成20年 7月 内閣官房地域活性化統合事務局主査
平成23年 4月 総務省行政評価局評価監視調査官（独立行政法人第一担当）
平成25年 6月 総務省人事・恩給局参事官補佐（退職手当第一担当）
平成26年 5月 内閣官房内閣人事局参事官補佐（研修担当）
平成28年 4月 内閣官房内閣サイバーセキュリティセンター参事官補佐

「ママはどうしておしごとに行くの？」いつか聞かれた時のために温めておいた台詞がようやく発動する時が来ました。「世の中のためと、自分のためと、家族のためだよ。」と、４歳娘を相手に滔々と語りだしたのですが（娘の理解度は微妙）、これから働く場を選ぶ皆さんにも同じことをお伝えしたいと思います。

育児休業から復帰後、二人の子どもの保育園送迎などのために職場にいられる時間が大幅に減る一方でやるべきことは山積、何もかも上手く回らない!という状況で自信を失う一方で、霞ヶ関の働き方自体に疑問を持つようになっていました。そこで、ちょうど同じ問題意識を持っていた同僚達とワークライフバランスに関する局内勉強会を立ち上げ、個人的な悩みから総務省職員（行政官）として何ができるかまで検討しました。

その議論では「少ない投入コスト（時間）でより大きな効果を生むこと」は、業務・行政システム改革や行政評価を通じて質の高い行政をいかに提供していくかという総務省のミッションと同じだということに気付かされました。今でこそ一大トレンドの「働き方改革」ですが、こうした個人レベルの挑戦が大きなうねりにも繋がっているのです。視点をダイナミックに変えて議論し、世の中に変化をもたらしていくことは、国家行政のマネージャーたる総務省の醍醐味です。

また、自分の成長実感を得られることも、働く上で大事な要素です。国家公務員制度からサイバーセキュリティに至るまで幅広い政策課題での経験に恵まれてきましたが、専門分野に関する知識や様々な行政手法など、日々新たなことを学び続けています。

最後に、総務省では今、誰もが働きやすい職場を目指して制度や体制の改革がどんどん進められています。皆さんも、今まさに変わりつつある総務省を、そして日本を変えていく原動力になってみませんか。